

中米のタスマル遺跡発掘調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23961

金大考古

第65号

The Archaeological Journal of Kanazawa University volume 65 November 2009

中米のタスマル遺跡発掘調査

伊藤伸幸（名古屋大学文学研究科）

はじめに

チャルチュアパ遺跡は、エル・サルバドル共和国の東部に位置しており（図1）、ラス・ビクトリア、エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマル、ペニャテなどの地区から成っている。タスマル地区はチャルチュアパ遺跡では、南に位置している（図2）。この地区は、ボグスが1940年代と1950年代初めに発掘を行った（Boggs 1943a, b, 1944, 1945, 1950）。1947年には国の歴史記念物として認定された。その名声にも拘らず、考古学的な意味が明らかではなかった。その不明確さは、建築上の複雑さにあった。この建造物には大小の規模で様々な改築や増築が施されていた。

一方、タスマル地区では、2つの考古学調査が行われていた。一つは、CONCULTURA（エル・サルバドル国立文化芸術審議会）がB1-2建造物で行っている修復に関わる考古学調査である。もう一つは、名古屋大学が行っている考古学調査である。

2005年2月15日に名古屋大学の考古学調査が開始した。この調査目的の一つは、タスマル地区に球戯場があるかを確認することである。この地区の北東部分には、球戯場を形成すると考えられている2基のマウンドがある。しかし、そのうちの1基は、1940年代まで墓地として使われていたために、部分的に破壊されている。このために、ボグスはこの部分で調査を実施しなかったのである。現在まで、このマウンド2基は考古学的に球戯場であったかは確認されていない。もう一つの目的は、この地区の建築的な発展に関する仮説を検証するためである。

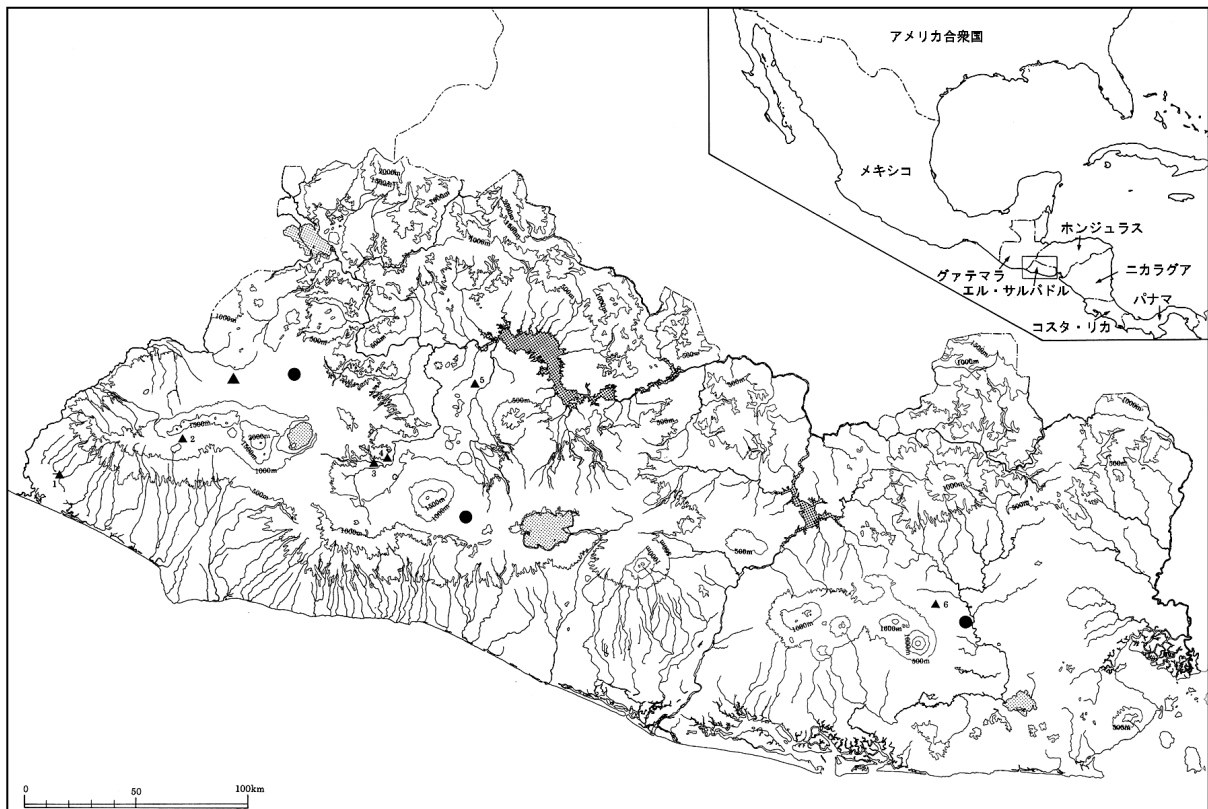


図1：エル・サルバドル主要遺跡

タスマル地区 B1-1 建造物の建築史に関する仮説

ここで示す仮説は、2003年から2004年にかけて、CONCULTURAと名古屋大学が行った測量調査に基づいている。この測量調査は、タスマル地区における保存修復作業が必要な部分の状態と位置を記録するために実施された。この結果、様々な改築と増築が行われたことが確認された。その建築史の複雑さが、この地区の建築学的な特徴を理解し難くしていた。

“列柱の神殿“(西基壇の上部建造物)を測量した結果、この建造物は南北30m長で独立して建てられたことが確認できた。B1-1建造物北には、”列柱の神殿“に似た建造物(北基壇)があった。北基壇は西基壇と同じ長さを持ち、それぞれの建築軸は直角に近い87度で交差している(図3)。

B1-1建造物は、大きな基壇(大基壇)の上に建っていた。大基壇は東西約73m南北87mであった。北基壇と西基壇は大基壇の一部と成っていた。この基壇2基は類似しており、同時期若しくはなんらかの関係を持って、当初、独立して建造されたことが考えられる。後の時期の増改築が考慮されるが、上部の建造物が左右対称に確認されるのは西基壇のみである。一方、この地区の建造物の正面が西を向いている。このため、北基壇より西基壇が重要な意味をもち、中心となる表玄関があった。北基壇が西基壇の正面に対して左右対称に建てられていたと仮定するならば、南基壇は北基壇と同じ距離にある可能性がある。

西基壇と北基壇の距離を測った結果を用いて、南基壇の位置を計算した(図3)。仮説では、南基壇の南側は拡大された大基壇の南端に相当する。また、この基壇では少なくとも3回拡張された可能性がある。この推定される基壇の南側は最初か2度目の建設期に相当する。このような建造物の拡張が北・西・南基壇にも考えられる。同様に、東基壇でも建築における対称軸を想定すると、その位置が計算できる。

B1-1建造物の東側には、この建造物に接して平面で約4×3mの小さな構築物がある。B1-1建造物に属するものかは不明であるが、西基壇の建築軸を東に延ばすとこの構築物の中心を通る。東側では、東に向かって少なくとも3回の大基壇の拡張が確認され、この構築物の位置に最初の拡張期の東基壇が計算される。

西基壇の上部の建造物は“列柱の神殿”として知られ、方形の柱群と左右対称に南北で各1部屋ある。西

の階段を上ると北と南の部屋の間には2つの柱が建っている空間がある。この空間が奥への入口となっている。北の部屋の出入口は東側のみにある(図3)。東側ではこの基壇の裏側は部分的にしか発掘されておらず、後側に建造物があったかどうかは不明である。B1-1建造物(ピラミッド)が造られる前の主神殿については、以下の2つの可能性がある。

1. 西基壇は、当初、主要な神殿として機能していた。
2. 中心となる基壇は北基壇と西基壇が交差する部分にあった。

仮説に従えば、この神殿はB1-1建造物の建築軸の北13mにあったと考えられる。ボグスはB1-1建造物の階段中央にトンネル発掘を実施したが、この神殿は検出されなかった。しかし、西基壇の北の部屋の入口は東側にあるため、西基壇の後に建造物があり、この上部の建造物が主神殿として機能していた可能性がある。

この仮説に従えば、タスマル地区の建造物の発展は次のようになる。

主神殿と4基の基壇を東西南北に建造した。西基壇は、主神殿に至る正面の入口を持つ建造物として機能していた。

次に、基壇4基の間にある空間を充填し、65×74mの巨大な基壇(大基壇)となった。その後、この大基壇の上にB1-1建造物(ピラミッド)が主神殿を覆うように建設された。資料が少ないために、B1-1建造物建設の発展段階は不明である。しかし、少なくとも3回拡張されたことが分かっている。

B1-1 南側での発掘調査結果

B1-1建造物の南側の3つの試掘坑では土が混じった石の層が検出された。東側では床下の層で土、アドベブロック、タルペタテと土の塊が観察できた。このように、B1-1建造物の東側と南側では建築材に違いがみられた。

B1-1建造物の南側では、建造物の壁の立ち上がりが確認できた。この建造物は、仮説で考えられた南基壇の可能性もある。これが正しいならば、西・北・南基壇はその存在が確認される。一方、床6-1～3とボッ

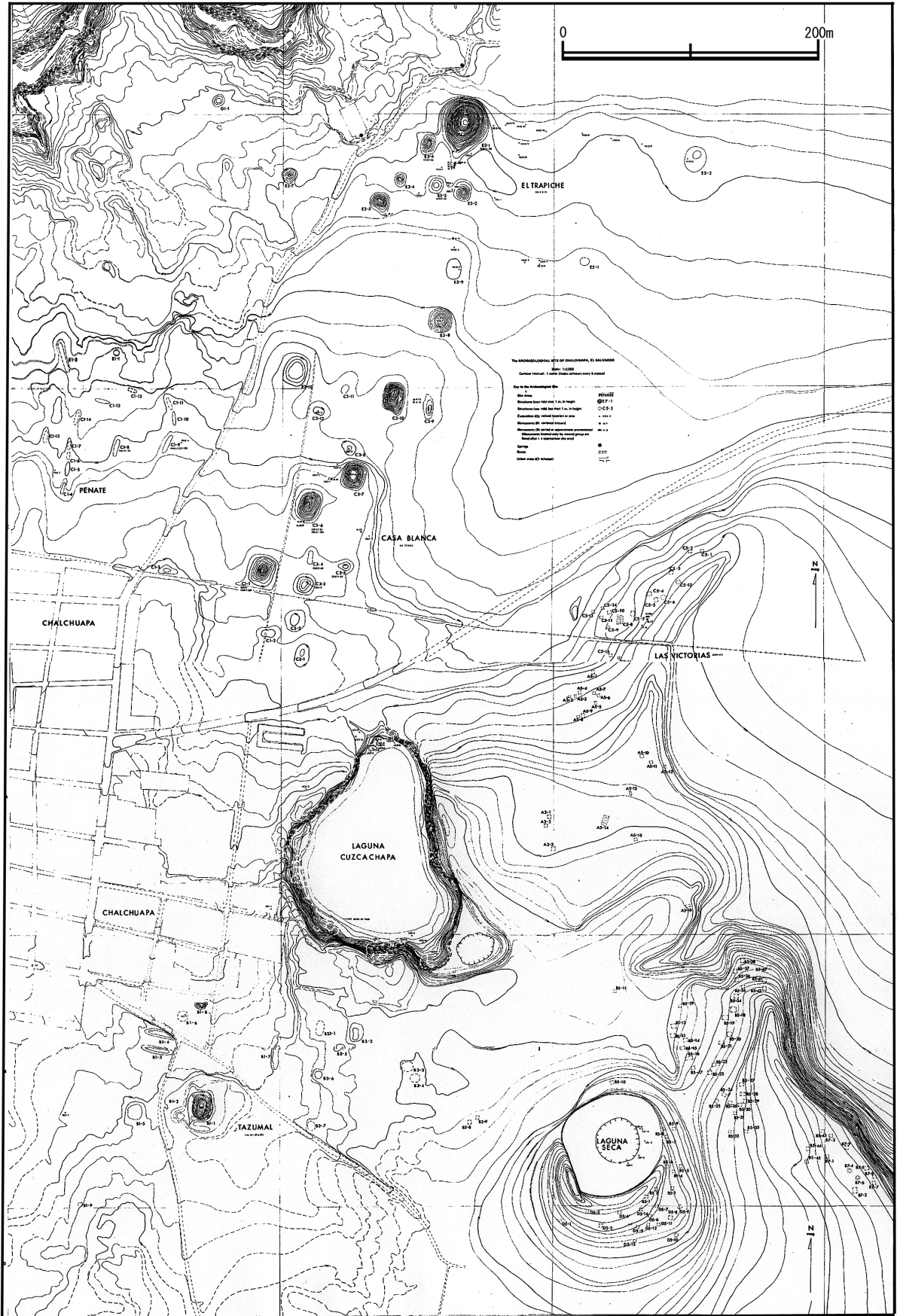


図 2 : 図 2- チャルチュアバ遺跡全図 (Sharer,1978)

グスの掘ったトレンチを考慮すると、東基壇の存在が推定できる。現在得られている調査結果を考慮に入れると、B1-1 建造物の建築史が組み立てられる。また、建築材の相違も考慮に入れると、以下ようになる。

- 1) 東基壇が土とタルペタテの塊を主な建築材として建設される。
- 2) 西基壇北基壇南基壇が建設される。西基壇がこの時期中心となる建造物であった可能性がある。
- 3) 東基壇が他の西南北の基壇 3 基と建築上異なっていた可能性がある。
- 4) 最後に、東西南北の基壇 4 基は覆われ、B1-1 建造物（ピラミッド）が建設された。

一方、南基壇を更新する際に、土器 2 点からなる供物が捧げられ、儀礼が行われた。この建設に伴う儀礼は即位式と関係する可能性がある。

おわりに

今後、B1-1 建造物の西側で発掘調査を継続する予定にしている。西側の列柱の神殿側からの発掘では埋もれた神殿の一部が検出された。この神殿の階段部分には破壊された部分があり、その下からはヒスイなどの副葬品を含む埋葬が出土した。また、主神殿階段部西側には斜壁そして張り出し部分が検出され、その張り出し部分では上面に破壊された跡があり、その穴の底には座葬の埋葬があった。こうしたことからこの主神殿の重要性が窺える。今後の調査からこの建造物の正確を明らかにしたいと考えている。

(e-mail: nobuyuki@lit.nagoya-u.ac.jp)

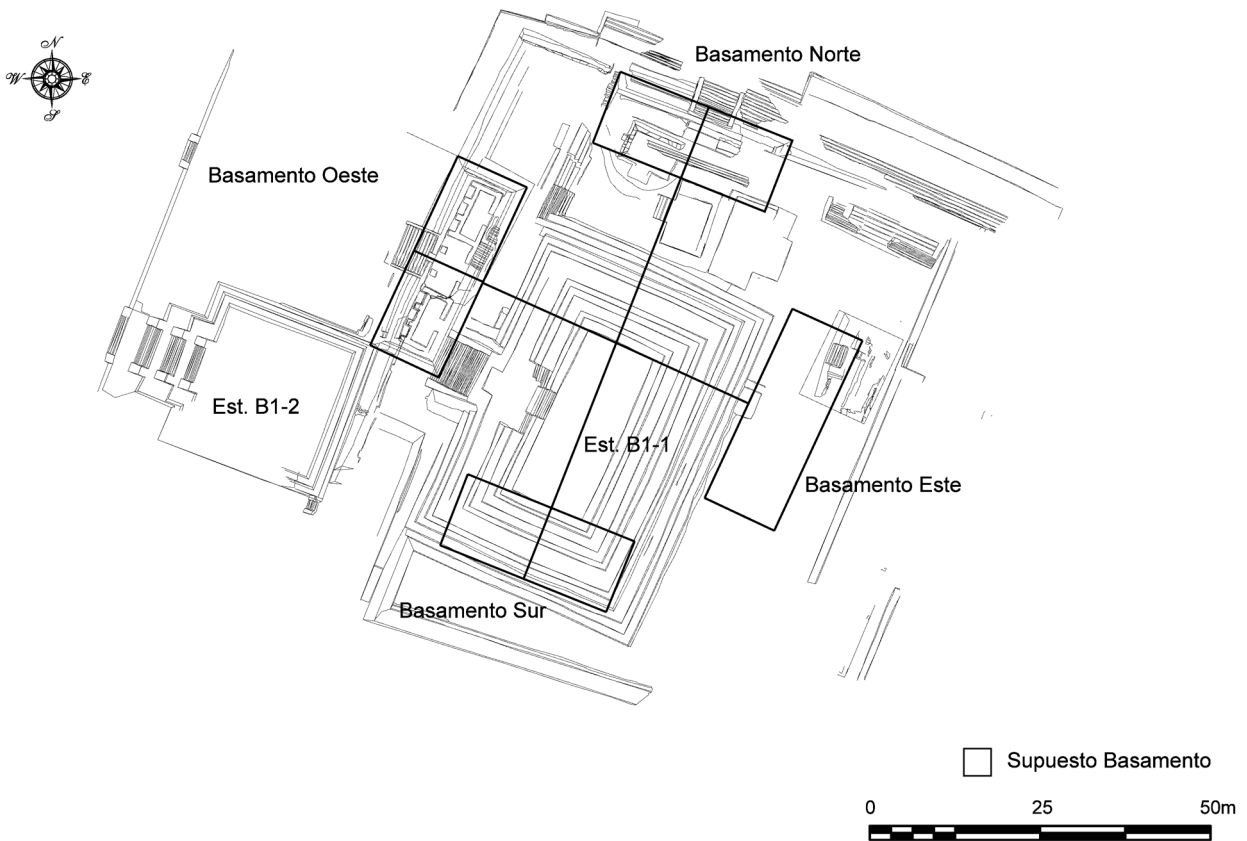


図 3：各基壇に対する仮説